

主 題：幸福に降服する5
 聖書箇所：マタイの福音書 5章6節

最近、私はあるひとつの人間に関する非常に深い真理に気付きました。これは老若男女を問わず、どの文化においてもどの人種においても見ることができると、この人間の歴史が始まってからこれまで、世界中のあらゆる人たちが多分もっていた傾向ではないかと思うのです。それは、人々が満足をしないうちに、人間はずばやくあるひとつのことをする、つぶやく、不平をもらすのです。何らかの期待が叶わなかったとき、私たちは不平をもらすのです。私たちはあらゆることに関して、ある特定の期待というものもっています。けれども、それが十分に達成されないとき、人々はつぶやき始める、不平をもらし始めるのです。必ずしもそれは、常に目に見えるもの、また、ことばとして聞かれるというものではありません。たとえば、レストランに食事に行ってお皿が汚いとき、こんな汚いお皿を出して…と、店員さんに言う人もいれば言わない人もいます。でも、皆思っています、期待していることはレストランに行けばきれいなお皿が出て来ると…。ある特定の期待が満たされないとき私たちは不平をもち、また、その期待が達成されるように、つまり、自分の願っていることが十分に満足できるように、私たちはときに必要以上のことをしてまで、そこに到達しようと努力します。このような特徴は世界中のどの国の人々を見ても、あらゆる人間の中に見て取ることができます。皆さんも多分、日常そのようなことを心の中で思うことがあるでしょう？

興味深いことは、このような特徴を天国に属する人たちももっているということです。誤解しないでいただきたいのは、天国に属する人がいつも不平をもらしているということではありません。そういう特徴ではありません。満足を得ていないことに対して、それが叶うように一生懸命生きて行こうとすることです。彼らが自分たちに約束されていることがら、それが完全に到達していないことに満足を感じないからそれを得ることができるよう生きて行こうとすることです。天国に属する人たちはその与えられることが約束されていることを心から願うがゆえに、それに向かって一生懸命進んで行くのです。決してあきらめることをしない、途中で萎えることがないのです。そのような心からの願望、それが天国に属する人たち、天国に属する民の特徴であるとイエスは言われ、それゆえに、その人たちは幸いであるとイエスは言われるのです。

今朝、私たちはもう一度マタイの福音書5章に戻って、この「至福の教え」を見て行きたいと思えます。いったい、どんな人が天国に属する人なのか、どんな特徴をその人はもっているのか、そのことをこれまでも何度かに渡って見て来ましたが、今日も続いて考えて行きます。これを見て行くことによって、願わくば、私たちもイエスが教える天国に属する人と同じ特徴ももっていると心から確信することができるように、また、もしそうでないとするなら、そのような者へと行って行くために為して行かなければいけないことを学んで行きたいと思えます。

イエスはこのマタイの福音書5章3節からこのように言われました。

- 「3 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。
 :4 悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。
 :5 柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。
 :6 義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。
 :7 あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。
 :8 心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。
 :9 平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。
 :10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

私たちはこの5：3から、イエスが天国に属する人たちに対してあなたは幸いであると宣言している姿を見るのです。そして、ここはまさに幸いを受けている人がどんな人なのかを私たちに示してくれる箇所です。もうすでに、最初の三つを見て来ましたが、この山上の説教の冒頭にあって、イエスは天国に属する人がどのような特徴ももっているのかということ、私たちにはっきり教えました。

☆天国に属する人の特徴

1. 自らの霊的貧困をよく知っている。完全に失われている破産した状態であることがよく分かっているのです。そして、このように霊的に神の前に何一つ誇るものももっていないがゆえに、
2. 悲しみをもっていた。そのような破産状態、貧困をもたらしたものは私たちの罪だからです。自らの罪深さを知っているゆえに、その人は悲しみをもっていたのです。
3. 柔和さをもっている。そして、神の前に何一つ誇るものがないことを理解し、それが罪によっても

たらされていることをはっきり理解しているがゆえに、神から私が受けるにふさわしいものは恵みではなくさばきだけであると知っており、私を神の前に立つことができるようにしてくださったことに対して、あらゆる祝福が与えられることに対して、その人はへりくだりのうちに感謝し、人々からどんなにひどい仕打ちを受けたとしても、私はそれを受けるにふさわしい者だからと言って、相手に対して最善を行なって行こう、そのように生きて行く、優しい者、柔和な者です。

これらのことばを聞いていたユダヤ人にはこのことばは衝撃的でした。なぜなら、自分たちはアブラハムの子孫であったから、また、自分たちは良い行ないをしてきたから天国に属する者だと確信をもっていたからです。けれども、イエスが言われたことはそれとは全く違うことで、そして、何よりも悲しいことは、周りで聞いていた多くの群集たちは皆このような天国に属する者としての特徴をもたずに、その場に立っていたことです。イエスはこれらの特徴を弟子たちに告げることによって、主はいったいだれが本当に天の御国に属するのかを明らかにされたのです。マタイ5章でイエスが語っている天の御国というのは、ユダヤ人に旧約聖書の中で約束されていた、メシヤが支配する王国です。そこに属するの属さないのかということ言われているのです。けれども、私たちはイエス・キリストを信じる者となったゆえに、今、パウロがピリピ書で言ったように、この天の御国に国籍をもっているのです。「**私たちの国籍は天にあります。**」とパウロは言いました(3:20)。それなら、私たちも同じ国の住民であるから私たちもここでイエスが語っている特徴をもっていないといけないのです。私たちも神の前に全くの貧困な状態である、何一つ誇ることはないということを知っていないといけないし、私たちもそれをもたらした罪に対して心からの嘆き、悲しみをもっていないといけないし、私たちも神から受けるすべてのことがらに私にふさわしくないすばらしいものだと理解し、それゆえに、神に対しても、他の人々に対しても、へりくだって、さばき以外のすばらしいことを為してくれるあらゆることがらに感謝し、柔和さをもって接して行かなければいけないのです。

今日は、4番目の「至福の教え」を見て行きます。そこで、同じように私たちは、私たちの生活の特徴を吟味したいと思います。

4. 義に飢え渴いている

クリスチャンの生涯は実にいろいろな方法で説明がされています。多くの人たちは、いったいどのような人物が本当にクリスチャンなのかということに関するテストをいろいろなところで挙げてきました。けれども、ロイド・ジョーンズ博士はこの第4番目の至福の教えを見て、これがそのようなテストの中でも最もすばらしいテストであると言いました。博士はこのように言っています。「キリスト者の信仰告白の問題全体について自分をテストしてみようとする場合、この聖句以上に男女のだれにでも適用できる良いテストを私は知らない。もし、この聖句があなたにとって聖書のことばの中で最も祝福されたものの一つであれば、あなたは十分な確信をもって自分はキリスト者であるということが出来る。もし、そうでなければ、あなたは根本からもう一度自分を検討し直すほうが良い。」と、非常に厳しいことばです。このようなきびしい宣告を博士はされるのです。20世紀、間違いなく5本の指に入る、神に最も用いられた説教者の一人です。私たちはこのみことばを見て自分を吟味しなければいけません。このような特徴をもっているかどうか、なぜなら、この特徴こそが天国に属する人がもっている特徴だからです。いつものように、二つのことばを見て行きたいと思えます。ひとつは、この祝福を受けた人物はどのような特徴をもっているか、もうひとつは、なぜこのような祝福が与えられているのか、その祝福の原因です。

(1) その人はどのような特徴をもっているか

霊的飢餓は本当の信仰者の特徴です。イエスはこのように言われました。「**義に飢え渴いている者は幸いです。**」、これがイエス・キリストが「**幸いです**」と宣告される人に見られる特徴です。私たちは何となく想像できます。これを聞いていたユダヤ人が非常に困惑した表情を浮かべている姿を…。いったいだれがそう思うでしょう？ 飢えて渴いている人が幸いだと…。では、これはどういう意味なのか、私たちはそれを知るために、もう少し詳しく、この「**飢え**」と「**渴き**」ということばを考えてみなければいけません。飢えと渴きが霊的な飢餓というものをもつ者の状態です。私たち現在日本に生きている者にすれば、このような飢えや渴きというのを想像することはできても、体験することはほとんどないでしょう。けれども、この当時の人たちはこの飢え渴きを日常的に体験することがあったのです。この当時、このメッセージを聞いていた人たちが、そこで何を理解したのかということを知らなければいけません。当時、このような極端な飢え渴きというのは事実頻りに起こっていました。ユダヤ人たちのほとんどの人たちが、実際に自分が仕事をして得た収入で肥満を体験することはありませんでした。食卓に肉が並ぶのは月のうち本当に限られた日だけでした。ほとんどの人は日雇いで仕事をしていました。それゆえに、彼らは十分な食事を得ることがないまま、生活を続けなければなりません。また、食事だけではありません。「渴く」ということを見ると、イスラエルの気候を考えなければいけません。砂漠気

候でときに強い太陽の日差しが彼らを苦しめ、旅をするとそこでは熱風の砂嵐が彼らを襲っていたのです。そんな中で彼らは心からの渇きを体験していたのです。食事に関して渇きに関して、私たちは今現在、そのような状況に置かれている第3諸国のことを考えなければいけないのかもしれませんが。当時の人たちはこのような飢え渇きを日常的に経験していたのです。皆さんの中にも第2次大戦後の食べるものがなかったときを生きられた方々がおられるでしょう。その方々は想像が付くかもしれませんが。どんなに食べたいと思っても物が無いのです、どんなに飲みたいと思っても水が無い、だから、何とかしてそれを得たいという願い、それがイエスがここで言わんとしていることであり、それが当時の人たちが理解した思いだったのです。今の私たちが思う飢え渇きはお腹がすいたから何か食べよう、のどが渴いたから自動販売機で何か買って来ようというものかもしれませんが、当時の人たちはそのような飢え渇きではありませんでした。そのことをよく頭に入れた上で、私たちはこの飢え渇きを考えなければいけません。霊的飢餓というのはこのような飢え渇きがあったのです。それはどんなものだったのでしょうか？具体的に見て行きましょう。

(A) 現実的なものだった＝この食事に対する願望、飢えや渇きというのは人間にとって最も根本的な最も必要とされる願望です。食べるものや水が無いときに、それが私たち人間にもたらす影響は計り知れません。皆さんも読んだり聞いたりしたことがおありでしょう。一袋の小麦のために親が子どもを売ります。今でもそのようなことが起こっています。貧困のある社会において…。私たちはそのような貧しさ、飢え渇きは想像することしかできないかもしれませんが、その中でも十分に分かることがあります。それは、私たちはその飢え渇きを心の中だけにしまっておかないということです。おなかのすいた、のどが渴いたと、実際に現実の生活の中に出てきます。このような強い願いというのは単に私たちがもつだけでなく、実際の生活に必ず現われるものです。飢えたら食べる、渴いたら飲みます。イエスは言われます。そのような願望は単に私たち天国に属する者たちがもっているだけでなく、実際の生活にはっきり現われてくるものだ。別の言い方をすれば、このような飢え渇きというのは、私たち天国に属する者たちの現実の生活なのです。想像ではないのです。行動となって現われてくるものです。皆さんは本当の飢え渇きを真似ることはできません。

(B) 継続的なもの＝イエスはここで「飢え渇く」ということばに継続を表わす動詞を使っています。そして、このことばをはっきり理解することは非常に大切なことです。イエスがここで語っている「飢え渇き」というのは天の御国に属する者がこの地上での生活において継続的に持ち続けるものであると言うのです。この地上にいる間に終わらないのです。ルカの福音書6：21、並行箇所と言われるところですが、そこには「**いま飢えている者は幸いです。あなたがたは、やがて飽くことができますから。**」と、今、飢え渇いている、そして、この飢え渇きは継続的なもの、そして、これ以上この状態が続くならもう生きて行けないという飢え渇きです。私たちがこのイエスのことばを見て行くとき、一つ大切なことに気付かされます。イエスは私たちが義をもっているとは言っていません。義に飢え渇いている、継続的にと言われます。このメッセージを聞いていた多くの群衆の中にはパリサイ人や律法学者たちがいました。彼らは「私は義をもっている」と言っていました。けれども、イエスは言われます。本当に天国に属する者というのは義をもっているのではなくて、義を心から追い求めていると。

(C) はっきりした一つの焦点に向かっている＝本当にこのような飢えや渇きをもっている人たちは、目の前にたとえどれほどのお金を積み上げられたとしても、パン一つのほうを選びます。それほど切実に食べ物を探しているから、飢えと渇きを満たしたいとそのことのみを求めるのです。人が何かを切実に追い求めているとき、その人に対してこれは一生懸命やらなければいけませんよと説得する必要はありません。その願いが現実的でより強いものであればあるほど、どうすればそれを満たすことができるかと考え計画し実践して行こうとし、そのため努力を惜しまないものです。そこには非常に鋭く先の尖った焦点があり、それ以外のものには目が向いていないのです。強い動機があるのです。

私たちはこのような思いを「飢え渇き」ということばに見ることができます。むしろ、この「飢え渇き」という表現以上にこのような思いをはっきり教えることはないでしょう。天の御国に属する者たちは、神に対してこのような飢え渇きをもっているのです。霊的飢餓は天国に属する人たちの特徴でなければなりません。天国に属する人たちは今私たちが生きている人生では満足できていないのです。その欠けたところを常に見い出しています。だから、その人は飢え渇いているのです。その神の基準が自分の人生にはっきり現わされるようにと、それは現実的なものであり、継続的なものであり、それ以外に私は目をくれないと宣言するのです。その人は常にあらゆる情熱をもって義を追い求めているのです。そのような追求がその人の生涯の中にはっきりと見て取れるのです。天国に属する人は、この地上においてこの義を完全に所有している者ではないのです。その義を追い求めて飢え渇いているのです。

では、「義」とは何でしょう？私たちが飢え渇くべき「義」とはいったい何なのでしょう？それを私たちははっきり理解しなければいけません。聖書が「義」ということばを使うとき、文脈によってそこ

にはいろいろな意味合いを込めて使われます。たとえば、パウロがローマ人への手紙の中でこの「義」ということばを使うとき、彼は、キリストがもっておられる義のことを話します。キリストがもっておられる義が私たちに与えられるというその「義」のこと、また、他の箇所では、私たちが実際に行なって行く正しい道徳的に良いことがらを指す場合もあります。

イエスはここで何を思ってこの「義」ということばが使われたのでしょうか？そのことを考えるとき、一つのことを上げることができます。イエスがここで話されていることは、天国に属する人がどんな人物なのかということです。それなら、キリストが与えてくださる義を追い求めなさいというのは少し違います。もうその義は与えられているはずだから。では、良い行ないのことかということ、イエスはあなたがそれをもっているというはおかしいと言われました。この山上の説教全体がパリサイ人や律法学者たちがもっていると考えていたその義に対する批判だからです。この「義」ということばが聖書全体を通して使われるときに、間違いなくその背後にあることは、だれかがその義を判断することです。特に、人間に関してこの「義」が使われるときには、神よっての報いという概念がそこに見て取ることができます。別の言い方をすれば、神は常にご自身の原則に基づいて、ご自身の規則に沿って、人々をさばいておられる、そのさばきの結果、ある人は義と定められるし、ある人は不義と定められるのです。聖書は神は義なるお方だと言いますが、神ご自身が完全な義の現われだから、神ご自身がすべての原則を決めておられる方だから、その原則に沿って私たちが審判され、私たちの義の基準が判断されるのです。イエスがここで言われていることはまさにこのことです。イエスが言われることは、神の完全な基準に沿って、私たちがこの人生を生きるその歩みです。あなたはあなたの人生において、神が正しいとされること、神が良いとされることを本当に求めて生きていますか？あなたは神があられるようにあろうとしていますか？と。だから、イエスは言われました。天の御国に入りたいと思うなら、あなたたちはパリサイ人や律法学者たちの義に優る義をもっていないといけなと。神が正しいとされるその「義」です。天国に属する人たちはそれを心から求めて飢え渴いているのだと言われるのです。

イエスがここで説明している人物というのは、神の完全な基準に対して飢え渴いている、神のみこころと言ってもいいのかもしれませんが、神が願っておられること、神が私たちに求めておられることを私はやって行きたいと、心から飢え渴いている人です。やがてやって来る天の御国において、イエス・キリストは完全な義をもってすべてを支配されます。この王国にはイエス・キリストの完全な義が現われます。それゆえに、その御国にもうすでに入っている者たちは、その王であるイエス・キリストがもっておられる義が、自分たちの生活に今この瞬間にも現わされることを心から願って生きるのです。それが天国に属する者たちの現実だからです。でも残念ながら、私たちはそのような完全な義を持っていません。だから、私たちは飢え渴くのです。ここでイエスが言っている「飢え渴き」ということばは、何に飢え渴くのか、その対象となるものを表わすときに、ギリシャ語ではこういう表現を使います。つまり、食べ物に飢えるという場合、食べ物全部を指すのではなく、その一部を指すことばが使われます。たとえば、私は食べ物に飢えていますという場合、その食べ物は世界中のすべての食べ物を含むのですが、実際に求めているのは今日の晩御飯であると、全部ではなくその一部を求めているのです。今このときの食べ物、コップいっぱいの水です。だから、全部の中の一部という表現を飢える、渴くということばを使うときに必ず使うのです。なぜこんな説明をするのかと言いますと、イエスはここでそういう表現はしないのです。イエスが言われるのはむしろこうです。あなたは飢え渴いています、それは義に対してであるけれど、全部の義の中の一部に対して飢え渴いているのではなく、全部の義そのものだ。つまり、霊的な飢え渴きをもっている人は、神があられるその姿すべてを求めているのです。神の基準すべてが自分のものになることを求めているのです。だから、この人は「私はこの部分が義になっているから、義を実践することができているから満足です、私の義は満たされた」とは言いません。その人はいつも義に飢え渴いています。すべての義を今手にしていないから、神が求めているすべてを私は今実践できていないからと…。

このような飢えや渴きをもっている人が天国に属する人の特徴だと言います。この飢え渴きは現実的なものであり、継続的なものであり、はっきりした焦点をもってそれだけを追い求めて行くようなものであり、それは、神が私たちに定めておられるあらゆる良いとされる基準です。神ご自身の姿なのです。それこそがまさに「義」の現われだったからです。私たちがよく知っていることばで表わすとすれば、このように言うことができます。天国に属する人は完全な義の現われであるイエス・キリストに似た者になりたいと心からの飢え渴きをもっていると。それが心の中で燃え続ける大きな情熱なのです。切実な願いなのです。自分の人生に神の義がはっきり現わされる、そんな生き方をしたい、そのように歩んで行きたい、そうなるために私は何でもしたい、どんなことがあっても何があっても他のことに目を向けることなく、神の義が私の人生に現われることをひたすら願って、それ以外に何も求めないと、クリスチャンにとってこれ以上に大切なことはないのです。

イエスのメッセージを聞いていた人たちの中には、この義をもっていると考えている人たちがいました。そのような人たちにとって、このような飢え渴きは存在しませんでした。彼らはもう十分もっていたから。そういう人たちにイエスは指差して、あなたは天の御国に属していませんよと言われるのです。皆さんは自分の生涯にこのような義に対する飢え渴きを見つけることができますか？皆さんにとって、神の義が自分の生涯に現わされることは、それほど大切ですか？クリスチャンはいろいろな良いことを求めますが、ほとんど聞かないことは、私は神の義が自分の生涯に明確に現われることを心から願って生きて行きますという発言です。他の何よりも、私自身が神がこの地上に歩まれるように歩んで行きたい、その神の基準に沿って私は生きて行きたいと、もしそう思っていないとするなら、イエスがパリサイ人や律法学者に向けていたその指が皆さんの心に向かっています。

イエスは「**義に飢え渴いている者は幸いです。**」と言われました。いったい、なぜ彼らは幸いなのでしょうか？そのことを簡単に見て行きましょう。

(2) なぜ、その人は幸いだと言えるのか

イエスは言われます、「**その人は満ち足りるからです。**」と。満足が約束されているからです。だから、その人たちは飢え渴いてこの地上を歩んでいたとしても、いつの日か必ずその飢え渴きは満たされると言うのです。この「**満ち足りる**」と訳されていることばは、マタイ15章33節と37節でも使われています。4000人の給食の話です。4000人の男性がいて、そこにはもっとたくさんの人々がいたのですが、食べ物がなかった、弟子たちはいったいどのようにしてこの人たちのお腹を満たすことができるのかと心配しました。33節「**そこで弟子たちは言った。「このへんぴな所で、こんなに大ぜいの人に、十分食べさせるほどたくさんのパンが、どこから手にはいるでしょう。」**」、その結果、37節「**人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、七つのかごにいっぱいあった。**」と、同じことばが使われています。このことばは、動物にえさをやってその動物たちの飢えが治まるときに使われます。そう少し、意識するならば、このことばは食事を与えることによって、もう私は食べたいと思いませんという状態にさせるということです。イエスは言われるのです。いつの日か必ず、今あなたがもっている飢えや渴きがもうないですと宣言されるときがやって来る、それが約束されていると。今この地上での生涯で義に対する心からの飢え渴きをもっている者たちは、いつか必ず、天の御国においてその飢え渴きが満たされる、だから、天の御国に属する者たちは幸いなのです。必ず、最大の満足が与えられることが約束されているから。今現在、私たちがもっている継続的な飢え渴きは、いつか必ず、満足が与えられることの証明なのです。イエスはそのように私たちに教えるのです。私たちがキリストを知りクリスチャンになり、天の御国に属する者となったときに、私たちは確かにイエス・キリストの義をもつ者となりました。パウロが言うように、イエス・キリストの義が私たちに与えられたのです。けれども、私たちが味わったその義は、もっと私は神の前に正しくなりたいという思いを与えるのです。

モーセは神に何度もお会いしました。最初に荒野で、その後、パロとのやりとりの中で神は彼に接してくださいました。シナイ山では40日40夜神は彼とともにいてくれました。その後も、会見の幕屋に神は何度も降りて来られて、モーセと顔と顔を合わせて話をされて、そこから出て来たモーセの顔は神の栄光が反映して光り輝いていました。そのモーセが神に願ったことは、神さまどうぞ、あなたをもっと見させてください、あなたの栄光を見たいと。私たちも同じです。神のすばらしさを知った私たちは神を知れば知るほど、もっともっと神を求めて行くのです。その義に対する飢え渴きを心からもって…。私たちはそれゆえに、神の義を実践し続ける者であり、実践しつづさらなる義が自分の生涯のうちに全うされて行くように、心から飢え渴いているのです。パウロはピリピ3：8-11でそのことを語っています。「**それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、：9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。：10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、：11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。**」と、パウロはキリストを知っていました。そして、そのキリストを知るということが余りにも価値のあることであるがゆえに、これまで行なってきたあらゆることがすべてちりあくただと思ったのです。けれども、そのパウロが心から願っていたことは、復活のからだを得ること、イエス・キリストと同じものになることでした。それがクリスチャンの歩みなのです。

皆さんどうでしょう？皆さんの人生は義に特徴付けられていますか？皆さんは義に飢え渴いていますか？他の何よりも義がほしいと生きていますか？いつの日か必ず神がその御国において私たちにキリストに似た者としてくださるから、その日を夢見てその姿を求めて生きようとしていますか？私たちの現在ある満たされていない思いは、私たちに心からの飢え渴きを起こさせるはずです。このメッセージの

最初に、満足が与えられないときに人々は不平不満をもらすと言いました。つぶやくのです。なぜ、私がこのことに興味をもったのか、それは、教会の中でクリスチャンが私は義に満足していないのですとこぼしている、不満につぶやいている、他のことでは私たちはすぐにつぶやきます。心の中でもうこんな状態ではいけない、もっと良くならなければいけないと、あるときにはそのために一生懸命努力します、それがほしいから…。それなのに、私たちクリスチャンは教会の中で、どうしてなぜ私には義がないのでしょうか、十分な義が与えられていないのでしょうか、義を实践して生きて行けないのでしょうかと、つぶやいている人がどれだけいるのでしょうか？なぜいないのでしょうか？私たちはもう一度自分の心の中を吟味しなければいけません。私たちは何を求めて生きているのでしょうか？神のすばらしさが現わされることだと、私たちは言うかもしれませんが。でも、本当に飢え渴いている人は告白するだけでなく、心からそのことを実践して生きています。もしかすると、皆さんはこのように言われるかもしれません。私は今自分の生涯の中に現わされている義で満足していますと。それなら、皆さんはパリサイ人や律法学者とあまり変わりありません。私たちは神の義を追い求めることに対して真剣にならないといけないのです。なぜなら、それが天国に属する者の特徴だからです。まるで、この義がなければ今日この日を生きて行くことができないかのように、私たちは飢え渴いて生きて行かなければいけません。いつか必ず、神がその不足分を満たしてくださる、溢れるばかりに私たちを義なる者に変えてくださるその日を知っているゆえに、私たちは一人ひとりがその義を追い求めて生きて行かなければいけないのです。